

復讐の創り方

水鳥川岳良

【あらすじ】藻潟創志（34）は、プラモづくりの大会で負け続け、プラモの楽しさを忘れていた。大会直前、寝る間を惜しんで作った作品を模型店に持ち込んだ藻潟だが、突如現れた青野翔（18）の不注意で作品が壊される。さらに翔は「プラモを作ったことはないが、大会で優勝するのは自分だ」と言い放つ。模型店の店主・仲導明（66）は藻潟と一緒に作ることを条件に、翔にプラモを販売する。反発する藻潟だが、仲に「プラモの楽しさを教えたうえで、完成したものを壊して復讐しろ」と言われ、翔とプラモを作り始める。翔はプラモを馬鹿にしながらも楽しそうに作り、完成間近になるが、そこでカッターで指を切ってしまう。今日はもうやめようと言う藻潟に、翔は続けたいと訴え、自分にとってプラモづくりは復讐なのだと言ふ。翔の父はプラモ好きだが、プラモを翔の母に捨てられたことで実家に帰ってしまったのだ。家族を捨てた父への復讐として、素人の自分が大会で優勝し

てみせたいと翔は言う。藻潟は続けることを認めるが、今度は腕のパーツが壊れてしまう。翔が諦めかけたとき、藻潟は壊された自分のプラモの腕パーツを翔に差し出す。二つのプラモは同シリーズで、パーツが流用できたのだ。こうして完成したプラモを翔は心から嬉しそうに眺める。それを見届けた藻潟は、プラモを箱で叩き潰す。翔は怒らず、ただ店に来た時に藻潟のプラモを壊したことを謝り、立ち去る。しばらくして、翔が店の前を通ると翔のプラモと藻潟の壊れたプラモが巧みに組み合わされた作品が大会で優勝している。藻潟は翔のプラモを実際には壊していなかったのだ。翔が仲に話を聞くと、藻潟は翔との合作だと言っており、賞金は翔に渡すよう指示していたという。遠慮する翔だが、「それで父親に会いに行きな」と言われ、賞金を受け取る。数日後、藻潟は模型店で子供向けのプラモづくり教室を開く。そして一番大事なものは「楽しんで作ること」と教える。

【登場人物】

藻潟 創志（もがたそうし）（34）会社員

青野 翔（14）中学3年生

仲 導明（みちあき）（66）模型店の店主

冷田 照美（ひえだてるみ）（29）デザイナー

配達員

翔の父

翔の母

部員

監督

子ども A

子ども B

○模型屋・外観

少し寂れた雰囲気の模型屋。店の外に向いたガラスの展示ウインドーに、組み立てられたロボットのプラモデルが並べられている。入り口の扉にはポスター。ポスターには「第28回模型王決定戦 賞金三万円」と書かれている。

仲の声「いやー、しかしこれまた」

○同・店内

物販スペースと、組み立てスペースに分かれている。物販スペースにはプラモデルの箱が所狭しと積まれていて、組み立てスペースには作業台が二台。二つのスペースの間の壁際にレジがあり、レジの奥には扉。

レジの前に藻潟創志(34)が立っている。藻潟はよれたシャツにジーパンという冴えない格好。目の下にクマがありかなり疲労が見える。レジの上には

汚しなどのペインティングが施され、作りこまれたロボットのプラモデル。レジの内側に仲導明(66)が座っており、そのプラモデルをまじまじと見ている。

仲「今回は気合の入りが一段と」

藻潟「ビクトリーV第8話。はじめてビクトリーがピンチに陥り、隠されていた性能が覚醒する直前の状態を再現しました。製作期間、三ヶ月。今年こそあいつを倒し、優勝をいただく。リベンジです」

仲「うん、これはチャンピオンもうかうかしてられないだろうな」

藻潟「寝る間も惜しんで作ってます。でもまだ完成じゃない。店長、何かアドバイスを」

仲、藻潟の様子を見て何か言おうとするがやめて、

仲「そうちゃんに教えられることはもうないよ。僕から見たら完璧だもん」

藻潟「いえ、まだまだ。調整が必要です」

と、ビクトリーVのプラモデルを組み立てスペースの作業台に移動させようとするが、目眩が起きてよろける。作業台に手を突き、倒れずに済む。

仲 「大丈夫？無理しすぎじゃない」

藻潟 「まだまだ、もつとクオリティを上げなきゃ」

仲 「(ボソリと) そうちゃん、プラモ作って楽しい？」

藻潟 「え？」

仲 「いや、そうちゃん、プラモ作るとき一番大事なことって何？」

藻潟 「いかにクオリティ上げるかでしょ」

仲 「(少し残念そうに) そっか。そうちゃんのプラモは魂こもってるもんね。作品への愛というか」

藻潟 「(仲の方を見て) わかります？やっぱ原作のメッセージとか、ちゃんと踏まえた上で作りたいですよね」

野球のユニフォームを着た青野翔(1

4)が入ってくる。

仲「いらっしやい」

翔「表のポスター、あれで優勝できるやつち
ようだい」

と、無造作に鞆を作業台の上に放り投
げる。藻潟のビクトリーVが鞆に潰さ
れる。

藻潟「あああああ！」

と、ビクトリーVに駆け寄る。

翔「何、うるさいんだけど」

藻潟、翔の鞆を乱暴にどける。

翔「何すんだよおっさん」

藻潟「こっちのセリフだ。俺のビクトリーV
になんて事してくれるんだ」

翔「ビクトリー？」

机の上には無残に壊れたビクトリーV。

翔、鼻で笑って、

翔「ちようどよかったじゃん、もう卒業した
ら？こんなの、こどものおもちやだよ。大
人なのに恥かしいと思わなきや。(仲に)で、

優勝できるやつちようだい」

仲「君プラモ作ったことあるの？」

翔「ないけど、こんなの余裕だろ」

仲、ため息をついて、

仲「大した自信だ。いいだろう。売ってもいいけど、条件がある」

翔「条件？」

仲「今日ここで、その人と一緒に作ること」

と、藻潟を指差す。

藻潟と翔「はあ？」

藻潟「ちよつと店長何言ってるんですか」

翔「やだよこんなキモいおっさん」

藻潟「なんだと」

仲「じゃあプラモは売らない」

翔、少し考え、

翔「わかったよ。おいおっさん、足引っ張るなよ」

仲「よし、じゃあとっておきのプラモを持ってこよう。そうちゃん、一緒に来て」

と、レジ奥の扉を開ける。

○同・倉庫

狭い部屋に大量のプラモデルの箱が積まれている。藻潟と仲が小声で話している。

藻潟「嫌ですよ俺」

仲「落ち着いてよ。プラモ壊されっぱなしじや気が収まらないでしょ？」

藻潟「そりやまあ。だからってなんで」

仲「手伝うふりして彼が作ったプラモ、壊してやればいいんだよ」

藻潟、驚いて仲を見る。

藻潟「さらっと悪魔みたいなことを」

仲「でもただ壊すだけじゃダメだよ。まずプラモ作りの楽しさを教えるんだ。そうして、自分がどれほどひどいことをしたか思い知らせる」

藻潟「……悪くない。だとすれば、作るプラモは」

と、プラモの箱を一つ手にする。

○同・店内

作業台の上に「リベンジャーZ」のプラモデルの箱が置かれている。ニッパ―やカッターなどの道具も。台の近くに藻潟と翔。仲はレジから様子を見ている。

藻潟 「ビクトリーVの兄弟機、リベンジャーZ。親友が操縦するビクトリーVが破壊されるのを見て、見習いパイロットだったリユウが復讐の怒りで初めて起動を成功させた機体だ。瞬く間に敵の」

翔 「そういうのいいから早く作ろうぜ」

藻潟 「こういうのが大事なんだよ」

翔 「おっさんにとってはその中でも、俺にとっては違うんだよ。いくら？」

仲 「千五百八十円」

翔 「高！もつと安いのないの？」

藻潟 「大会で優勝したいなら最低ラインだ」

翔がしぶしぶと鞆から貯金箱を取り出し、蓋を開けて中の小銭を全部作業台

の上に出す。翔が数えて、

翔「千四十円」

藻潟「あと五百四十円」

翔「これしかない」

藻潟「はあ？」

仲「おまけしといたげるよ」

翔「ラッキー」

藻潟「お礼くらい言えよ」

翔「いいから早く作ろうぜ」

と、プラモの箱を開けて中身を乱暴に机の上に広げていく。

藻潟「ああ、もっと丁寧に、壊れたらどうすんだ！」

翔「いちいちうるせーなー」

と、ニツパーで適当にパーツを切り取るようにする。

藻潟「バカ！説明書読んだのか？」

翔「とりあえず全部バラすんだろ？」

と、パーツを切り取る。

藻潟「違う！おいそこ切っちゃダメなところ！」

その様子を見て仲が苦笑している。レジの上に時計があり、1時8分を指している。

レジの上の時計が2時10分を指している。

翔「できた！」

と、少し歪んでいるリベンジヤーZの右腕を掲げる。

翔「どうだおっさん、言っただろ？こんな余裕だって」

藻潟「（無気力に）ああ、そうだな。お前の実力を見誤っていたよ」

と、レジにいる仲に近づき、

藻潟「（小声で）絶望的に不器用ですよあいつ！1時間かけて右腕だけ、それもヤスリとかなしで」

仲「予想外だったね。ここまで不器用だとは」

藻潟「完成までどれだけかかるか」

仲「でも見てよ、あの顔」

翔がまんざらでもなさそうにリベンジ
ヤーZの右腕を眺めている。

仲「復讐は順調に進んでいるよ」

藻潟「……確かに」

仲「リベンジヤーZのリユウも言ってたろ」

藻潟と仲「復讐に焦りは禁物」

と、顔を見合わせて頷く。

仲「時間をかけて丁寧に。その方がビクトリ

ーも報われるさ」

藻潟が、翔が使っていない方の作業台
を見る。そこには壊れたビクトリーV。

頭部のパーツが藻潟の方を向いている。

翔「おっさん、早く続きやるぞ」

藻潟「はいはい」

と、作業台に戻る。

翔「やっぱ余裕だな。大人になってこんな
に熱中するとかほんとダサい。早く卒業し
ろよ。おっさんも甲斐性なしになっちゃう
ぞ」

藻潟「(イライラと) 余計なお世話だ」

翔「さーて、次はーっと」

と、リベンジャーズの右腕を台の上に
雑に放る。藻潟、それを見て、

藻潟「(真剣な声で) おい」

翔「(少し驚いて) なんだよ」

藻潟「お前がプラモを舐めてんのはわかった
けどな、一度作り始めたんなら、最後まで
やり切れよ」

翔「は？だから作るって言ってんだろ」

藻潟「せっかく作ったパーツ、乱暴に扱うな。

壊れたら完成させられないんだぞ」

翔、藻潟の真剣な様子に気圧され、

翔「わかってるよ」

と、右腕を手に取り、壊れてないか確
認し、そっと机の上に置きなおす。

藻潟「よし。次は、左腕だ。さっきとほぼ同
じだからヒントなしでいいな？」

翔「余裕だし」

と、パーツを切り取る。

藻潟「だからそこは切るなって！」

仲がその様子を見て微笑んでいる。

○同・外観

店の前にトラックが停まり、配達員が下りてきて荷台を開ける。

○同・店内

扉が開き、配達員が大きめの段ボールを持って入ってくる。

配達員「ちわっ」

と、レジまで荷物を持ってくる。

仲「ああ、いつもありがとう」

と、受け取りのサインをする。

配達員は組み立てスペースの翔を見て、

配達員「珍しく若い子がいるね」

仲「ああ」

配達員「(藻潟に) そうちゃんの子か？」

藻潟「なわけないだろ」

翔「このおっさんに相手がいるかよ」

配達員「確かにな」

藻潟 「ああ？俺だって告白されたことくらいあるぞ。近所になるみちゃんていう子がいてな。妹みたいに俺のこと『そう兄ちゃん』って呼んで、『大きくなったら結婚してください』って『』って」

翔 「妄想の話はいいから」

藻潟 「妄想じゃねーよ」

翔 「てかいつの話だよ」

藻潟 「小学生くらい？」

配達員 「それ以来何もないのか」

仲 「ほら」

と、受領書を配達員に渡す。

配達員は受け取って、

配達員 「年内までだっけ？寂しくなるね」

仲が話をやめるように表情で訴えかけるが、配達員は気にせず続けている、

配達員 「店畳んだ後どうするの？」

藻潟 「店畳む？」

と、仲を見る。

配達員 「あ、言ってなかったの？ごめん」

と、逃げるように受領書を持って店を出ていく。

○同・外観

配達員が急いで店から出てくる。扉に足をぶつけて、

配達員「いってっ」

と、よろめきながらトラックに乗る。

○同・店内

藻潟がレジに近づいてきて、

藻潟「どういうことですか」

仲「そのままだよ。店閉めることにしたんだ」

藻潟「どうして」

仲「厳しいんだよ。新しいお客さん少ないし」

翔「入りずらいもんな、この店」

藻潟「黙ってる」

仲、藻潟を制して、

仲「(翔に) なんで入りずらいの?」

翔「暗いし狭いし、値札ないから値段わかん

ないし、いつ見ても（藻潟を指さし）「こんなおっさんばっかだし。そもそも何が楽しいのかわかんないし」

藻潟「楽しそうに作ってただろ」

翔「別に楽しくない」

藻潟「お前な」

仲「どうやったら、入りやすくなる？」

翔「体験会とか？やってみたくても家ではできないやつもいるだろうし」

藻潟「そんな簡単にいくかよ」

翔「やってみなきゃわかんないだろ」

藻潟「お子様が考えるほど世の中甘くないんだよ」

仲「とにかく、そういうわけで模型王決定戦は今年で最後だから。一人とも頑張ってね」

翔「余裕で俺が優勝だな」

藻潟、自分の荷物を片付け始める。

仲「どうしたの」

藻潟「家帰ってビクトリー修理します」

翔「は、待てよ」

藻潟 「最後の大会ならなおさら、絶対負けられない。お前に構ってる時間はない」

翔 「とか言って、俺に協力して負けるのが怖いんだろ」

藻潟 「そんなわけないだろ。このへたくそな」

仲 「（遮るように）だめだよ。それなら参加は認めない」

藻潟 「はい？」

仲 「審査はプロに頼んでるけど、主催はこの店だ。それくらいの権利はあるよ」

藻潟 「職権濫用じゃないですか」

仲 「自分で言ったじゃない。一度作り始めたんなら、最後までやり切らなきゃ」

藻潟、仲と翔を見て、しぶしぶ荷物を下す。

○自動販売機の前（夕）

模型店のすぐそばにある自動販売機。

夕日がさしている。

仲が自販機のボタンを押す。取り出し

口からジュースを取り出す。反対の手には缶コーヒートを2本持っている。

○同・店内（夕）

翔「できたあ！」

と、リベンジャーZの頭部を藻潟に見せつけるように掲げる。

翔「な？な？」

藻潟「わかったわかった」

と、面倒くさそうに答える。

翔、まじまじと頭部を見て、

翔「（ぼそりと）かっこいいじゃん」

藻潟、それを見て少し笑顔になる。

が、扉が開く音がして、不機嫌な顔に戻る。仲が入ってきて、

仲「いよいよ完成？」

翔「やっぱ余裕だった」

藻潟「まだですよ、本体のパーツがそろったところ。何とか日が暮れるまでには完成しそうです」

作業台の上には、リベンジャーZの両腕、両足、胴体がばらばらの状態で置いてある。

仲「じゃあちよつと休憩にしたら？」

と、手に持っていた缶飲料を見せる。

翔「待って、このゲートの処理だけ」

と、カッターで作業する。

仲「ゲートなんて、言うようになったね」

藻潟「さすがに慣れたみたいですよ」

仲「でも、慣れた頃が一番」

翔「痛！」

と、左手の指を押さえる。

仲「大丈夫？」

藻潟「見せてみる」

と、翔の指を見る。

藻潟「結構深いな。店長、救急箱ありますか？」

仲「ああ」

と、倉庫に救急箱を取りに行く。

藻潟「傷口洗うぞ」

と、翔を連れてトイレに行く。

○同・トイレ（夕）

藻潟が翔を連れて入ってきて、洗面所で翔の傷口を洗う。

翔「つつ」

藻潟「我慢しろ」

翔「（痛そうに）余裕だし」

藻潟「今日はここまでだな」

翔「嫌だ！最後まで作って大会に出す！」

藻潟「傷ふさがってからにしろ」

翔「大丈夫だよ」

藻潟「血が付いたらどうすんだ。続きは明日

でいいだろ」

翔「二日も部活さぼったら母さんにばれる」

藻潟「はあ？お前部活サボってたのか。じゃ

あ家持って帰って、血が止まってから作れ」

翔「絶対無理。母さんプラモ嫌いだから」

藻潟「じゃあ何で大会出ようとしてんだよ。

お前別にプラモ好きじゃないんだろ？」

翔「……復讐」

藻潟「え？」

仲が救急箱を持ってきて、

仲「そうちゃん、持ってきたよ」

翔「父さんに復讐するためだよ」

藻瀉が翔の顔をじっと見つめる。

○（回想）翔の家・翔の父の部屋

4畳ほどの部屋。ロボット、戦艦、車など、いくつものプラモデルがケースに入れて飾られている。床にプラモデルの箱がいくつも散らかっている。作業机があり、そこで翔の父がプラモデルを作っている。

ユニフォームを着た翔が入ってきて、

翔「ただいま」

翔の父「（振り返らず）おかえり」

翔「キャッチボール付き合ってよ」

翔の父「おお、ちよつと待ってくれ」

翔「えー」

と、近くに置いてあるプラモデルの箱を手に取る。

翔「こんなの何が楽しいの」

翔の父が振り向いて、

翔の父「作ってみたいとわからないかもな。

(嬉しそうに) やってみるか？」

翔「いいよ俺は、母さんに怒られるし」

翔の父「そうか」

と、少し残念そうに笑う。

翔「それよりキャッチボール」

翔の父「ああ、ちよつと待ってくれ」

翔「父さんそればっか」

翔の父「ほんと、あとちよつとだから」

と、笑って、作業机に向かう。

○(回想) 同・翔の父の部屋(夜)

電気がついておらず薄暗い。

ケースに飾られていたプラモが全部なくなり空になっている。床に散らかっていた箱も全くなっている。スーツを着た翔の父が呆然とそれを眺めており、その背中を翔が見ている。

翔「母さんが」

翔の父「そうか」

翔「大丈夫？」

翔の父「ああ」

翔「父さん？」

翔の父「キャッチボールでもするか？」

翔「もう夜だから、危ないよ」

翔の父「そうか」

○（回想）同・リビング

電話が鳴っている。翔の母が電話に出る。

翔の母「はい、青野です」

翔がやってきて、扉の陰からその様子を伺う。

翔の母「会社に来てないって、どういふことですか？」

○模型店・店内（夕）

作業台の周りに、藻潟、翔、仲が座つ

て話している。翔は指をガーゼで押さえている。

翔「父さん家にも帰ってこなくなつて。母さん、毎日泣いてる」

藻潟「自業自得だろ」

翔「母さんは悪くない！父さんが、大人のくせにプラモなんかはまつてたから」

仲「どっちが悪いかは僕たちにはわからないよ。お母さんにはお母さんの、お父さんにはお父さんの事情があつたらうから。でも、何事にも限度はあるよね」

翔が作業台の上のリベンジャーズのパーツを見て、

翔「シロウトの俺が優勝したら、プラモなんかくだらないって証明になると思つて。それで、賞金で父さんところ行って、こんなくだらないものにはまつてたんだぞつて言つてやろうつて」

仲「お父さんどこにいるか知ってるの？」

翔「大阪の婆ちゃんところ。母さんが電話して

るの聞いた」

仲「大阪。往復三万円あれば十分だね」

翔が頷く。

藻潟、翔の様子を見て、

藻潟「血、止まったか？」

翔「え？」

藻潟「指」

翔「ああ、多分」

藻潟「じゃあ、続き作るぞ」

翔「……うん」

藻潟と翔が作業台に向かっている。

翔の指には大きめの絆創膏が貼ってあり、少し血がにじんでいる。

藻潟「一旦、本体を組み立てる。武器はそのあとだ」

翔「わかった」

と、リベンジャーZの胴体に、足パーツをつける。両足をつけると、作業台の上に自立するように置く。

翔「おお！」

藻潟「よし、ちゃんと立つな。次は腕」

翔、右腕パーツをつけようとするが、
上手くはまらない。

翔「不良品じゃねーの」

藻潟「落ち着け。ちゃんとはまるから。角度
変えてみる」

翔、強引にパーツを組み合わせる。

翔「コツわかったかも」

と、左腕パーツもはめようとするが、
なかなかはまらない。

藻潟「おい、乱暴にするなって」

翔「大丈夫、さつきもこうやって」

と、力づくではめようとすると、「パキ
ッ」と音がして腕パーツの接続部が割
れる。

翔「あ」

と、助けを求めるときに藻潟を見る。
藻潟がため息をつく。

○同・倉庫（夕）

藻潟、翔、仲が何かを探している。

仲「ないよそうちゃん。伝票に載ってないんだから」

藻潟「店長のつけ忘れもあるでしょう」

仲「無いよひどいな。ビクトリーシリーズは古い作品だからあれが最後だったんだ。メーカーにも在庫ないかもしれない」

翔「もう金もないし、接着剤で何とかならない？」

藻潟「接着面が小さすぎる。いいからお前も探せ。もう一個くらい同じのあるだろう」

翔「もういいよ。あんま遅くなると母さん心配するし」

藻潟「復讐するんだろ」

翔「……もういいよ」

藻潟、手を止めて翔を見る。

藻潟「リベンジャーZのパイロット・リュウは悪の組織に妹を奪われ、その復讐のために戦うことを決めた。でもパイロットとし

ての才能がなくて、リベンジャーを起動させることすらできなかつた。それでもリュウは諦めなかつた。厳しい訓練に耐えて、耐えて、ある日、親友のために再び復讐心に火が付いたとき、ついにリベンジャーを動かすことができた。だから、お前も諦めるな」

翔は何も言わずプラモを探し始める。
藻潟、それを見て自分も探し始める。

○同・外観（夜）

日が暮れている。

○同・店内（夜）

作業台の近くで翔が俯いている。レジのそばに藻潟と仲が座っている。

仲「こんなことなら、もう一個注文しておけばよかつたな」

藻潟「仕方ないですよ」

と、翔の様子を見る。それから、もう

一つの作業台の上、壊れたビクトリーVを見る。頭部パーツが藻潟を見ている。

藻潟「ビクトリーV第34話」

翔「もういいよその話は」

藻潟「ビクトリーの基地が敵の攻撃を受ける。リベンジャーは直前の戦闘で片腕を失っていたため出撃できず、ビクトリーは一人で敵に立ち向かうことになった」

と、話しながら作業台に近づく。

藻潟「しかし多勢に無勢。あっけなくビクトリーは倒されてしまう。何とか機体を基地に回収するも、バラバラの状態で戦闘はもちろん修理も困難。このままでは基地が危ない。ビクトリーたちはどうやってこの危機を切り抜けたと思う？」

翔「どうでもいい」

藻潟「ビクトリーとリベンジャーは兄弟機だつて言ったろ。作りが同じなんだ。だから、ビクトリーの左腕を、リベンジャーに着け

て、リュウが出撃。なんとか敵を追い払った」

と、ビクトリーVの左腕パーツを手に取り、外装をはがす。

藻潟「プラモでも、同じつくりになってる」

と、左腕パーツの骨組みを翔に差し出す。

仲「そうちゃん」

翔「でも」

藻潟「お前のが完成しないと、俺は大会に出られないみたいだからな」

翔、パーツを受け取ってまじまじと見る。丁寧にやすりがけされていて、翔が作ったものより完成度が高いのが素人目にもわかる。

翔「すげえきれい」

藻潟「当たり前前だろ。俺が作ったんだから。」

ほら、外装パーツ付け替える」

翔が促されるまま、リベンジャーZの外装を付けていく。同じつくりなので、

綺麗にはまる。外装を付け終わると、左腕を胴体に慎重にはめる。今度はすんなりとはまる。

翔、驚いて藻潟を見る。藻潟は頷いて、頭部パーツを指さす。翔が大事そうに頭部パーツを手にして、ゆっくりと胴体に着ける。

リベンジャーZの本体が完成する。

翔「わぁ」

翔がキラキラとした目でリベンジャーZを見る。藻潟はそれを満足げに眺める。仲はその二人を見て微笑む。

翔「なあ、リュウの復讐はどうなるんだ？」

藻潟「どうなる？」

翔「成功する？」

藻潟、少し考えて、

藻潟「ビクトリーV第44話。ビクトリーとリベンジャーは協力して、ついに敵の最強ロボ、デストロイXを倒す。そしてリュウはそのパイロットと対面することになる」

翔「復讐成功!？」

藻潟「しかしそこで衝撃の事実。なんとデストロイXのパイロットはリュウの妹だった。妹は殺されたのではなく、無理やりデストロイXのパイロットにされていたんだ」

翔「それで？」

藻潟「おしまい」

翔「え？」

藻潟「リュウがメインの話はそこまで。妹を取り戻して。主人公じゃないからな」

翔「それは、復讐できたってこと？」

藻潟「自分で見て考えろ。公式サイトで全部見れるから」

翔「えー」

藻潟「ほかのロボットもかっこいいぞ。デストロイXなんて紫で、腕が8本もあるんだ」

○同・外観（夜）

冷田照美（29）が歩いてくる。オフィスカジュアルでおしゃれな服装。鞆に

は紫で腕が8本あるロボット・デスト
ロイXのキーホルダーがついている。

○同・店内（夜）

扉が開いて、照美が入ってくる。

照美「こんばんは。まだ開いててよかった」

藻潟「げ」

照美「（藻潟を見て）あらー、奇遇ですね。

万年2位ちゃん」

翔「（仲に）万年2位？」

仲「彼女、プラモ大会のチャンピオンなんだ。

彼女が参加するようになってから4年間、

そうちゃんはずっと2位」

藻潟「何の用だ」

照美「買い物ですけど？馬鹿ですか？」

藻潟「ならとつとと買ってさっさと帰れ」

照美「言われなくても。（仲に）これください

い」

と、仲にメモを渡す。

仲「はいはい。（メモを見て）こんなにたく

さん？」

照美「最後の大会に向けて、完璧な仕上げにしておきたいので」

と、藻潟を見る。藻潟は睨み返すが、すぐに照美が「最後」と言ったことに気づき、仲を見る。仲は気まずそうにレジのほうに逃げる。

照美「もしかして2位ちゃんは、試合放棄ですか？こんなところで遊んでるなんて余裕ですね」

と、作業台のリベンジャーズを見る。

藻潟「順位で呼ぶな。名前で呼べ」

照美「え、(照れて)じゃ、じゃあ、創志さん」

藻潟「何で下の名前なんだよ」

照美「2位ちゃんは今年も2位ですね」

藻潟「今年こそ勝つ」

照美「どうせまたビクトリーでしょ」

と、作業台の上の壊れたビクトリーVが目に入る。驚いて、

照美「え？は？え？これ、あなたの」

藻潟「いろいろあったんだよ」

照美「は？見損ないました。自分のプラモが完成してもないのに、プラモ教室ごっこですか？私のことよっぽど舐めてるんですね」

藻潟「舐めてねーよ。でも、こいつも大会に出たいっていうから」

照美「大会？これで？」

と、笑い出す。

照美「このへたくそな、糞ださプラモで？本気？いや、正気？」

翔、シヨックを受けて目を伏せる。

藻潟「笑うな！」

照美、驚いて笑うのをやめる。

藻潟「こいつは今日、初めてプラモを作ったんだよ。すっげえ不器用なのに諦めずに十分かつこよく作れてる。そりやお前ほど上手くないけど、笑うのは違うだろ」

照美「……ごめんなさい」

と、店を出ていく。

○同・外観（夜）

店から照美が飛び出してくる。店内から紙袋を持った仲が追いかけて出てきて、照美に紙袋を渡す。照美、財布を出して代金を支払おうとする。

○同・店内（夜）

作業台で藻潟と翔が黙々と作業している。

翔「さつきは、ありがと」

藻潟「別に。あいつ嫌いなんだよ」

翔「俺、ちよつとプラモわかってきた気がする」

藻潟「いや、お前はまだまだだぞ」

翔「違うよ」

藻潟「なんだよ」

翔「ちよつと、楽しいかも」

藻潟、翔を見る。そして笑顔になって、

藻潟「そうか」

翔「うん」

藻潟 「よかったよかった」

と、満足そうに作業を続ける。

藻潟 「みんな一回はやるんだよ、指。モデラ

ーの通過儀礼みたいなもんだな」

翔 「モデラー」

と、絆創膏を貼った指を見る。

藻潟 「だからお前も、もうモデラー。まあ、

ケガしないに越したことはないけど」

扉が開いて、仲が入ってくる。

藻潟 「あ、店長、ちよつと」

と、仲に手招きする。

○同・倉庫（夜）

藻潟と仲が小声で話している。

藻潟 「あいつ、プラモ楽しいかもって言いま

したよ」

仲 「やったねえ」

藻潟 「もうすぐ完成ですし」

仲 「一時はどうなるかと思ったけど、良かった良かった」

藻潟 「はい。これでようやく復讐が果たせま
す」

仲 「うん、え？」

と、驚いて藻潟を見る。

藻潟 「え？」

仲 「まだ復讐とか考えてたの？」

藻潟 「当たり前じゃないですか、何のために
やってきたと思ってるんですか」

仲 「復讐は、復讐しか生まないよ」

藻潟 「あんたがやれって言ったんでしようが」
仲 「いや、だって、必死にプラモ探して、ビ
クトリーの腕まであげて」

藻潟 「家に帰ればストックありますし」

仲 「チャンピオンから庇ってたじゃない」

藻潟 「あれは焦りましたね。俺がへこませる
前にへこまされてたまるかって」

仲が呆然とする。

藻潟 「奴の生意気な根性、ぶっ潰してやりま
すよ」

○同・店内（夜）

翔が一人でプラモを作っている。武器を本体に装着して、

翔「よし、完成」

と、作業台の上に立つリベンジャーZを見て、満面の笑みを浮かべる。

それから翔は隣の作業台の上の壊れたビクトリーVを見る。頭部パーツと目が合う。

翔、もう一度リベンジャーZを見る。

倉庫から藻潟が出てくる。その後ろから心配そうに仲も出てくる。

藻潟「お、完成したか？」

翔「うん。それでさ」

藻潟「最後、確認のために寝かせてみな」

翔「う、うん」

と、リベンジャーZを寝かせる。

藻潟「いろんな角度から見て、変なところがないか探すんだ」

翔、言われた通りにしながら、

翔「うん。あの、俺さ」

藻潟が突然プラモの箱でリベンジャーZを思い切り叩く。リベンジャーZは完全に箱の下に入って見えない。

翔は驚いて呆然とする。

仲は困った表情で頭を抱える。

藻潟「どうだ？」

と、翔の顔を覗き込む。

藻潟「今、どんな気分だ？」

翔「どんな気分？」

藻潟「そうだ。思い出せ、お前がここに来て最初にしたこと。自分がされてみてどんな

気分だ？」

仲「やめなよ」

翔「いいよ。俺が悪いんだ」

と、ゆっくり自分の鞆のほうに歩く。

翔「さつき、完成したりベンジャー見て、おっさんにあげようって思ってたんだ。お詫びに。だから、おっさんがそうしたかったんならそれでいいよ」

と、鞆を持つ。

翔、藻潟と仲に向かつて頭を下げて、翔「すみませんでした、大事なもの壊して。

ありがとうございます。値段おまけしてくれて。作り方教えてくれて。それ、捨てておいてください」

と、店を出ていく。

藻潟、無言でそれを見送る。

仲「そうちゃん」

藻潟「思ってたのと違う」

仲「そりやあなるでしょ。せっかく作ったプラモ、どれだけ辛いかそうちゃんが一番わかるはずでしょ？」

藻潟「はい、わかってますよ。あいつずっと楽しそうだったし。だから」

と、プラモの箱を持ち上げる。箱は蓋だけで底がない。リベンジャーZは無傷で横たわっている。

仲、溜息をついて近くの椅子に座る。

仲「あの子、ときどき外から覗いてたんだよ。」

何年か前から。多分ほんとはずっとプラモ
作って見たかったんだね」

藻潟 「素直じゃないですね」

仲 「そうちゃんが言う？」

藻潟がリベンジャーZを手取る。

藻潟 「また来ますかね」

仲 「どうだろう。少なくとも中には入ってこ
ないかも」

藻潟 「外からで十分です」

と、リベンジャーZを手取る。

○翔の家・翔の父の部屋（夜）

電気がついておらず薄暗い。

空のケースが並んでいて、それを翔が
ぼんやりと見つめている。それから、
自分の指に貼られた絆創膏を見る。

○グラウンド

野球部が練習をしている。

その中に翔もいる。

翔は自分の左手の指を見ている。絆創膏はなく、少し傷の跡が残っているが、ほぼ綺麗に治っている。

部員「集合！」

部員たち、それぞれ返事をして、ベンチ付近に集まる。

監督「来週はいよいよ、3年生の最後の試合だ。気合い入れていけよ」

部員たち「はい！」

監督「解散！」

部員たち「あざっした！」

と、片づけを始める。

○模型店の近くの道

翔が歩いている。そつと模型店の方を見て、驚く。

○模型店・外観

翔が走ってきてきて展示ケースをかぶりつくように見る。そして勢いよく店内

に入る。

○同・店内

翔が勢いよく入ってくる。レジで新聞を讀んでいた仲がそれを見て驚く。

仲「やあ、こんにちは」

翔「あれ、外の」

仲「ああ、大会の結果ね」

翔「あれ、俺」

○同・外観

ウィンドーに、プラモデルが並んでいる。それぞれのプラモデルには順位とタイトル、作者名が書かれたカードが添えられている。2位は照美で、タイトルは「隠された正体」。デストロイXのプラモデルだ。

1位は、バラバラにされたビクトリーVと、それを庇うように立つ、ぼろぼろのリベンジャーZ。その左腕はビク

トリーVの外装になっている。2体ともペインティングなど丁寧に施され、組み立ての甘さによるパーツの歪みや、壊れた部分が逆にいい味を出している。タイトルは「復讐の創り方」。

○同・店内

翔が興奮気味に、

翔「あれ、あの、おっさんが？」

仲「ああ、見事優勝だ」

翔「でも何で。壊したはずじゃ」

仲、近くにあるプラモデルの箱から蓋を外して、

仲「これを、こう」

と、自分の手を蓋で隠す。

翔、驚きの表情。

仲「プラモづくりの苦労は、人一倍知ってるからね」

翔「あのさ、あれ、俺も作るの手伝ったって言っただけかな？全然、俺が作ったやつ」

ままじやあんなにかっこよくなかったのは
わかってるんだけど、でも、一応、俺も作
ったわけだし」

仲「だめだよ」

翔、意気消沈し、

翔「そう、だよな」

と、出口に向かおうとする。

仲「手伝ったんじゃないかって、半分は君が作っ
たんだから合作だってさ。作者の名前見な
かった？」

翔「え？」

○同・外観

ウインドーの中、一位の作者の欄に、
「藻瀉創志&野球少年」と書かれてい
る。

○同・店内

仲「だから、賞品も山分けだってさ」

と、「優勝」と書かれた祝儀袋を取り出

し、翔に差し出す。

翔「さすがにももらえない」

仲「受け取ってくれないと僕が困る。怒られちゃう」

と、肩をすくめる。

翔、しぶしぶ受け取る。

仲「おめでとう。賞金3万円」

翔「半分じゃないの？」

仲「『俺は賞状、あいつが賞金』だそうだよ」

翔「でも」

仲「それでお父さんに会いに行けるでしょ」

翔、少し悩んで、

翔「ありがとうって、伝えて」

と、店を出ていこうとする。

仲「あ、ねえ」

翔が振り返る。

仲「プラモ、作ってみてどうだった？」

翔、笑顔になって何か言おうとする。

藻潟が棚の整理を手伝っている。

藻潟「それで、あいつの復讐はどうなりましてかね？」

と、別の棚を整理する仲に声をかける。

仲「さあねえ。あ、でも、プラモ一つ買って帰ったよ。簡単なのくださいって」

藻潟「へー」

仲「しかし最後にそうちゃんが優勝してよかったよ」

藻潟「それ、なんで俺にだけ教えてくれなかったんですか。店閉めること」

仲「そうちゃんは、小さいころから知ってるからさ。ずつとうちに来てくれてたし。こうしてたまに手伝ってもらってるし。ちょっと心配で言い出せなかったんだよね」

藻潟「なんですか心配って」

仲「なんだろう。プラモの師匠としての心配かな」

藻潟「もう教えることないって言ってたじゃないですか」

仲、笑顔ではぐらかす。

藻潟「あ、店長、一個お願いがあるんですけど」

仲「なに？」

藻潟「俺今度店でやりたいことがあって」

と、ポケットから紙を取り出して、仲に渡す。仲、それを見て驚く。

○同・外観（夕）

照美がウインドーをじっと見つめている。藻潟が店内からゴミ袋を持って出てきて、照美と目が合う。

照美「いい気味でしょうね」

藻潟「別に、俺一人の力で勝ったわけじゃないから」

照美「あのリベンジャーがこんなにかっこよくなるとは。やっぱ、すごいよニイちゃん
は」

藻潟「だから順位で呼ぶな。もう二位じゃねーし」

照美「兄ちゃん」

藻潟「だから」

照美「そう兄ちゃん」

藻潟、一瞬考えて、驚いて照美を見る。

照美「思い出した？」

ウインドーの中、2位の作品のタイト
ルは「隠された正体」。

藻潟「……るみちゃん」

照美「久しぶり」

藻潟「気づかなかった」

照美「5年間も」

藻潟「ごめん、でもだって」

と、照美を見る。照美は今日もおしゃれな服装。

照美「こつち戻ってきたんだ。なのに店で会
っても全然気づいてくれないし。だから私
の好きだったデストロイX作ったら思い出
してくれるかなって思ったら、なんか優勝
しちゃってすごい敵視されるし」

藻潟「ごめん」

照美「今年のは、やっぱそう兄ちゃんのプラ
モだなって感じがする」

藻潟「俺が全部作ったわけじゃないけど」

照美「でも今までのよりずっと、そう兄ちゃ
んっぽいよ。ドキドキとかワクワクが伝わ
ってくる感じ」

藻潟、ウインドーの中のリベンジャー
を見る。

(フラッシュ)

翔が楽しそうにプラモデルを作る様子。

藻潟「そうだな。俺も久しぶりだったかも、
あんなふうに作れたのは」

○翔の家・リビング

翔の母が料理をしている。翔が紙袋を
手にやってきて、その背中に声をかけ
る。

翔「来週の試合さ、中学最後なんだ」

翔の母「うん、応援に行くね」

翔「父さんにも見てほしい」

翔の母の手が止まる。

翔「だから、俺、会いに行ってくる。大阪。

お金ならあるから。プラモデルの大会で優

勝したんだ、俺。友達と、一緒に作って。

その賞金」

翔が母の様子を伺うが、翔の母は振り

向かない。

翔「母さんも、一回作ってみたら」

と、紙袋からプラモデルの箱を取り出

して机の上に置く。

翔「プラモデルって、結構楽しいよ」

と、出ていこうとする。

翔の母「着いたら、電話して。心配だから」

翔「うん」

と、出ていく。

翔の母が机に近づき、プラモデルの箱
を手にする。

○模型店・外観

仲がウインドーの掃除をしている。

店の前にトラックが停まり、配達員が下りてくる。

配達員「(仲に)ちわっ」

仲「ああ、ありがとう」

配達員「(荷台を開けながら)店続けるんだって？」

仲「決まったわけじゃないけど。やってみな
きゃわからないからね」

配達員「何が？」

仲「新規顧客の開拓」

と、店内を覗く。

○同・店内

数名の小学生くらいの子どもたちが、
組み立てスペースでおしゃべりをして
いる。全員から見やすい位置に藻潟が
立っている。

藻潟「みんなに今日作ってもらうのは、未来

戦士フューチャーバトラーとって」

子どもたちはおしゃべりに夢中で藻潟の話聞いていない。

藻潟「みんな聞いて、大事な話してるから聞いてー」

その様子を藻潟の隣で照美が苦笑いで見ている。

子どもA「そんなのいいから早く作ろうよ」

藻潟「こういうのが大事なんだよ」

子どもB「せんせーにとつてはそうでも、俺らにはそうでもない」

藻潟「（ため息をついて）わかったよ。じゃ

あ、作ろう」

子どもたちが歓声を上げる。

藻潟「でもその前に、一番大事なことをひとつだけ」

子どもたち「えー」

藻潟「1個だけだから、よく聞け」

藻潟、軽く息を吸って、

藻潟「プラモは、楽しんで作ること」

パーツを切る音がする。

藻潟 「つてそこ切っちゃダメなところ！」
と、止めに行く。

《おわり》